

半世紀前からの

贈り物

蒲郡市民間大使
内田雅敏プロフィール
蒲郡町生まれ
東京弁護士会所属
著書「乗っ取り弁護士」
「これが犯罪? ビラ配りで
逮捕を考える」など多数

「今、蘇る『文集』」

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目飛び込んできました。いろいろなテーマごとに書かれている文集を読み進むうち、当時の同級生の顔が、一人ひとり浮かんでくる。同時に、走馬灯のように出来事が思い出されます。

そして、この文集もあとがきを残すだけとなりました。



「いつつぼし」には教師達による「あとがき」がある。

あとがき

「さあ書いてごらん」と言うのと「書くことがない」と言うのが2年生の始めの子どもたちの声でした。子どもたちは書くことがないのではなく「書くことをみつけよう」としないのだと思いました。身につけた文字を使って、自分の考えや感じを表わすということに気づかずにいるのです。

・・・(中略)・・・

殊に内向的な子どもは文字によって自分の気持ちを訴えるという点で私たちも、もう一度子どもたちを見直し反省させられました。のびのび育ってきた子どもたちの作品をあつめて文集を作りたいと考え、まだ始めたばかりだが第一集を出す運びになりました。子どもたちの真剣な態度に全員を載

せたいと思い、割愛しましたので子どもたちの気持ちも充分わかってもらえない点がありますが、この点ご了承ください。詩は人の目だけで見るのではなく、色をみたり光を感じとったり音を聞いたり、においを嗅いだり、体全体を働かせてみるのが大切です。こんな点を頭に入れて、一次一句をかみしめながら読んでいると二百有余人のそれぞれの子ども顔が、心の中でさまざまの形で頭の中に浮かんできます。

当時9歳であった私たちも来年はもう還暦、早いものである。テレビの普及していない時代に幼少期を過ごすことができ幸せであったと思う。黄ばんだ「文集」を上げしげながめっていると、よくぞひっそりと生き残っていてくれたと思う。半世紀を経て蘇ったのだ。大切な「宝物」のようにも見えてくる。ひらがなの「さ」と「ち」を間違えて使っている児童がいるのもほほえましい。

このような「宝物」を遺してくれた当時の教師たちに感謝したい。5人中4人の顔までは思い出せるのだが、なぜか竹組担任の教

師の顔だけが浮かんでこない。年齢からしてもう亡くなられた方が多いと思われるが、どなたかまだご健在でこの一文が目にとまればうれしいのだが。

(おわり)

(追記)

「文集」の写しをかっての幼な友達らに送ったところ、皆喜んでくれた。「懐かしい文集をじっくり拝見しました。文集を読みながら子ども時代の自分、同じクラスのお友達、先生方を思い出し、自然と顔がほころんでまいりました。思いもかけないすばらしい贈り物がありがとうございました。ぜひ、たくさんのお友達に読んでいただいて、当時を懐かしく感じてほしいと思いました。そして、また皆様と再会できる機会がありますように!!」(女性)

「懐かしい文集を送っていただき本当にありがとう。目尻を下げ頬を緩めながら一気に読みました。竹島の橋での釣りのこと、あさり採りに行ってその日の夜、父親と一緒にしょんぼりに潮水を汲みに海まで歩いていき進駐軍に会ったこと、確かに昔は飛行機でビラをまいていて拾いにいったこと、桑の実を食べて口を紫